
教王護国寺蔵「伝真言院曼荼羅」の再検討

京都市立芸術大学 定金 計次

一般に「伝真言院曼荼羅」と呼ばれている教王護国寺所蔵の両界曼荼羅は、我が国に残る最古の彩色本であるが、様々な意味で美術史上の位置付けが極めて難しい作品である。本図について、初めて詳細な研究を行ったのは高田修氏である。1956年に発表された論文において同氏は、文書資料により同寺西院に伝来した可能性が強いことを指摘し、納入箱蓋裏に残る「昌泰二年」(899年)銘と実際の制作時期との関係を否定しつつも、請来本の両界曼荼羅を縮小して900年前後に我が国で制作されたものと結論付けた。本曼荼羅に関する研究はその後目立ったものが現れなかった。20年ほど経過して、柳沢孝氏によって本曼荼羅に関する注目すべき具体的な提言がなされたのは、よく知られたところである。同氏は、本図を積極的に「西院曼荼羅」と呼ぶことを提唱し、中国において宮廷画家*(チョウ)慶が853年に制作し円珍が請来したものを、我が国で縮小し写したとした。

柳沢説が現れてからも、新たな研究の展開は見られていない。ただ2002年に、中野玄三氏が胎蔵曼荼羅を中国製とする一方で、金剛界曼荼羅を日本製とする考え方を呈示した。いずれにしても、中国・日本とも比較するのに適当な作例が非常に少なく、以上の諸説に対して賛同も批判も実証的には困難で、研究の停滞は無理からぬことと感ぜられる。

かかる状況のため、本発表において完璧な結論を提出し得る訳ではない。ただ次のような考え方を、より妥当なものとして呈示したい。最も重要な点は、様式的検討に基づき、本図を両幅とも9世紀中頃乃至後半制作の中国製と考えることである。それは、高田氏と柳沢氏が大曼荼羅を縮小したと考えた根拠の一つである、金剛界四印会における三昧耶形の描き直し、及び理趣会における界線の訂正を、本図が大曼荼羅の縮小でなく、元来この大きさに制作されたため起こったと解することと繋がる。また他の両界曼荼羅のうち、本図と系統が近いとされる醍醐寺五重塔壁画や教王護国寺乙本が、むしろ本図を本格的な大きさに拡大して制作した図に基づくと思われる図像的特色の一部に含んでいることとも関連する。

なお本図と真寂の『諸説不同記』に言う「或図」との関係については、部分的に存することを認める。しかし小野玄妙氏のように「或図」を「円覚寺曼荼羅」と同一視する説は採らない。よって「或図」を宗叡請来本とする小野説に与せず、本図を宗叡請来とする資料的根拠はないと看做すものの、伝来と様式から見て本図が宗叡の録外請来本である蓋然性は否定し切れなれないと思われる。

高田氏は、本図の強い暈取りをインドでなく西域と関係付けたが、本図の特異な様式は、やはりインドから伝播したと考えざるを得ない。対応する現存作例がインドに欠如しているけれども、強いて言うとも本図は、8世紀頃の東部インド様式が海路中国に伝わり、それが大きな変化を受けずに受容され描かれたのでないかと想像されるのである。